

茨城工業高等専門学校

研 究 彙 報

第 53 号

平成 30 年 3 月

RESEARCH REPORTS

OF

IBARAKI NATIONAL

COLLEGE OF TECHNOLOGY

NO. 53

MARCH 2018

茨城工業高等専門学校

茨城工業高等専門学校研究彙報 第53号

目 次

- 1 小式部内侍の大江山の歌の異同について—「ふみまだもみず」と「まだふみもみず」
を中心に— 桐生 貴明 (1)

小式部内侍の大江山の歌の異同について―「ふみまみみず」と「まだふみもみず」を中心に―

桐生貴明

1、はじめに

古典の諸作品を読む際に、私が常に意識してしまうのは、眼前の作品が作者のオリジナル（他者の手が入っていない、純粹にその作者の手によって成った作品という意味、複写などの意味ではない）なのか否か、ということである。時代が下り、近現代の作品の場合、例えば、芥川龍之介の『羅生門』の結びの部分などは、初出「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた」から現行の「下人の行方は誰も知らない」へと数度改変が行われたことが知られるが、それは作者芥川自身が行ったもの（仮に芥川以外の人物が携わったとしても、少なくとも芥川が了解していたもの）と理解して問題はないだろう。しかし、古典文学の本文異同については、作品の成立年代が古くなるほど、どの時点で改変がなされたのか（作者自身が作品の改変を試みたものなのか、あるいはオリジナルを書写した人間の手による改変なのか、あるいは書写されたものをさらに書写していく段階で手を加えられたのか、など）ということを追究するのが困難になる。

ところで、『金葉和歌集』（二度本巻九雑上 五五〇番歌）には、小式部内侍作とされる次のような歌がある。

和泉式部保昌に具して丹後に侍りけるころ都に歌合侍けるに、小式部内侍歌よみにとられて侍けるを定頼卿局のかたに詣で来て、歌はいかゞせさせ給、丹後へ人はつかはしてけんや、使詣で来ずや、いかに心もとなくおぼすらん、などはぶれて立ちけるを引きとゞめてよめる

大江山いくの道のとをければふみもまだみず天の橋立

（引用は新日本古典文学大系『金葉和歌集・詞花和歌集』）

母である和泉式部は恋多き女流歌人として知られ、その娘小式部内侍もまた恋多き女流歌人として知られるが、若くして亡くなつてしまったこともあり、勅撰八代集に収められている歌は、当該歌を含めわずか数首である^{注1}。とは言え、『百人一首』に収載される「大江山いくの道の遠ければまだふみもみず天の橋立」の作者として、後代にその名が知られている。

右に挙げた『金葉和歌集』の小式部内侍の大江山の歌は、第四句目が『百人一首』のものとは異なっている。このことは歌意に少なからず影響を与えることになる。また、歌句の異同が見られるということは、どこかの時点で改変があつたわけで、どの段階で改変が起つたのか、ということも考えておく必要がある。そこで、本稿では小式部内侍の大江山の歌の歌句の異同について整理し、考えてみることにする。

2、大江山の歌を収載する文献

『金葉和歌集』は、第五番目の勅撰和歌集で撰者は源俊頼であるが、その編纂状況は他の勅撰和歌集と若干異なる点を持ち、白河院に奏上するまでに二回やり直しを命じられたという。そのため、初度本、二度本、三奏本と構成内容の異なりが見受けられる。当該歌の収載に関しては、初度本は、写本が完本でないため確認できないものの、二度本、三奏本にはその収載を確認できる。

二度本と三奏本の間で、当該歌に関する詞書の異同も見受けられるが、作歌事情に関する説明は大きく異なるものではないと言つてよい。母和泉式部が藤原保昌に従つて丹後に下つた折、小式部内侍が歌合の歌人として拔擢され、それを聞きつけた藤原定頼が、小式部内侍に対して、歌合の歌はどうするのか、母に

作ってもらうように頼んだのか、(丹後に使いを出したのか、返事は来たのか)、などとからかったので、小式部内侍が即興で歌を作った、というものである。その歌は、掛詞「いくの」、「ふみもまだみず」、歌枕「天橋立」、さらに「ふみ」が「橋」の縁語、などというように、技巧を見事に織り込んだ秀歌として伝えられている。

この歌は、『金葉和歌集』だけではなく、歌論集や複数の説話集にも取り上げられている。ここで念のため、小式部内侍の大江山の歌が収載されている主な文献の成立年代を見比べるために、それぞれが成立したと思われるおおよその年代を記してみる。

『俊頼髓脳』(永久三・一一一五年頃)

『金葉和歌集』(大治元・一一二六年頃)

『袋草紙』(保元四・一一五九頃?)

『梁塵秘抄』(治承四・一一八〇年頃?)

『無名草子』(建仁二・一一二〇年頃)

『定家八代抄』(建保三・一一二五年頃)

『八代集秀逸』、『時代不同歌合』、『百人秀歌』(嘉禎元・一一三五年頃?)

『百人一首』(小倉山庄色紙和歌)、『嘉禎元・一一三五年頃?』

『十訓抄』(建長四・一一二五年頃)

『古今著聞集』(建長六・一一二五年頃)

時系列に並べてみると『俊頼髓脳』(俊頼無名抄・俊秘抄とも呼ばれる)が初出ということになる。初出とは言いながら、小式部内侍が亡くなったといわれる万寿二年(一一〇二五)からは九〇年ほど経っており、この間、小式部内侍の大江山の歌がどのような経緯をたどったのか、現段階で確認ができない。小式部内侍作の歌が見られるのは『後拾遺和歌集』(承保二・一一〇八六年)以降となる。右に掲げた文献のうち、『俊頼髓脳』(源俊頼著)、『袋草紙』(藤原清輔著)、『無名草子』(俊成著)、『定家八代抄』(藤原定家撰)に掲載されている小式部内侍の大江山の歌に関する記述を挙げてみる。

・『俊頼髓脳』(新編日本古典文学全集『歌論集』から引用)

大江山生野のさとの遠ければふみもまだ見ずあまの橋立

これは、小式部の内侍といへる人の歌なり。ことの起りは、小式部の内侍は、和泉式部がむすめなり。親の式部が、保昌が妻にて、丹後に下りたりける程に、都に、歌合のありけるに、小式部の内侍、歌よみにとられて詠みける程、四条中納言定頼といへるは、四条大納言公任の子なり。その人の、たはぶれて、小式部の内侍のありけるに、「丹後へつかはしけむ人は、帰りまうで来にけむや。いかに心もたなくおぼすらむ」と、ねたがらせむと申しかけて、立ちければ、内侍、御簾よりなから出でて、わづかに、直衣の袖をひかへて、この歌を詠みかければ、いかにかかるやうはあるとて、ついゐて、この歌の返しせむとて、しばしは思ひけれど、え思ひ得ざりければ、ひきはり逃げにけり。これを思へば、心疾く詠めるもめでたし。

・『袋草紙』(新日本古典文学大系『袋草紙』から引用)

(一)、白紙を置く作法)

歌合有るの比、長元か、小式部内侍歌人に入るの時、母泉式部、保昌の妻となりて丹後国に在り。定頼卿、小式部内侍の局に立ち寄りて戯れ云ふ。「いかに、丹後へ人は遣はし候や、いまだ帰り参らざるか。」と云ひて起つ時に、式部直衣の袖を取りて云はく、

大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

定頼ひきやり逃げしと云々。

・『無名草子』(新潮日本古典集成『無名草子』から引用)

「小式部の内侍こそ誰よりもいとめでたけれ。かかる例を聞くにつけても、命短かりけるさへ、いみじくこそおぼゆれ。さばかりの君に、とりわきおぼし時めかされ奉りて、亡き跡までも御衣など賜はせけむほど、宮仕への本意、これにはいか過ぎむと思ふ。果報さへいと思ふやうに侍りかし。

よろづの人の心を尽くしけむ、妬げにもてなして、大二条殿にいみじく思はれ奉りて、やむごとなき僧の子ども生み置きて隠れにけむこそ、いみじう

めでたけれ。

歌詠みのおぼえは、和泉式部には劣りためれど、病限りになりて死ぬべくおぼえける折に、

いかにせむいくべき方も思ほえず親にさきだつ道を知らねば

と詠みたりけるに、そのたびの病たちまちにやみたりけるとかや。それにて、この道のすぐれたるほどは見知りぬ。

また、定頼の中納言に、

大江山生野の道の遠ければまだふみも見ず天の橋立

と詠みかけたりけるなども、折につけてはいとめでたかりけり、とこそ推し量らるれ

・『定家八代抄』（新編国歌大観から引用）

卷十八 雑歌下

和泉式部丹後国に侍りける比、中納言定頼文やありつると尋ね侍りければ

小式部内侍

大江山 いくのの道の 遠ければ まだふみも見ず 天のはしだて

詞書や題詞に示される詠歌状況について、表現の長短や異なる部分は少なくないが、大江山の歌そのものは『袋草紙』以降は『百人一首』の歌と同じである。ただ、源俊頼の『俊頼髓脳』には、第二句「生野の里」第四句「ふみもまだみず」とあり、『金葉和歌集』の第四句目「ふみもまだみず」に近い形で記されている。これは、源俊頼が『金葉和歌集』の選者であることと何らかの関連があるうことは想起されるわけであるが、『金葉和歌集』よりも後の文献でいずれも第四句は「まだふみもみず」とあり、どの時点で歌句が変化していったのかをごく表面的に考えると、『袋草紙』が成った時点、あるいはそれまでの時点で「まだふみもみず」の形になっていたということになるのだろうか。

3、「まだふみもみず」の異同について

さて、歌の第四句目「まだふみもみず」については、『袋草紙』以降「まだふみもみず」となっていることが看取される。二句目の「生野の里」についても含めると第二句と第四句で異なりが見られるということになる。この異同の存在については、『俊頼髓脳』、『金葉和歌集』のそれぞれの写本間の異同としても見受けられる。『俊頼髓脳』は定家本系、顕昭本系などの諸本の存在が知られる。京都大学図書館蔵『無名抄俊頼』（久世本）や関西大学図書館蔵本『俊秘抄』などには第四句目を「またふみもみず」とあり、久邇宮家旧蔵本『俊頼無名抄』や国会図書館蔵本『俊頼髓脳』、冷泉時雨亭文庫蔵本『俊頼髓脳』などには「ふみもまたみず」とある。また、『金葉和歌集』のおおよその写本系統と第四句目は次のように分けられる。

・初度本（完本存在せず、当該歌なし）

・二度本（初撰二度本系） 伝橋本公夏筆本、公実筆本など「またふみもみず」

（再撰二度本系）

a、精撰本系 伝慈鎮筆本「ふみもまたみず」 二条為明筆本「ふみも

またみず」

b、中間本系 伝兼好筆本（正保版二十一代集）「またふみもみず」 伝

為家筆本「ふみもまたみず」

c、流布本系 伝為明筆本「ふみもまたみず」

・三奏本 伝良経筆本など「ふみもまたみず」 伝良経転写本「またふみもみ

ず」

なお、右の諸本の書写年代を簡単に確認しておく、伝慈鎮筆本、伝為家筆本が鎌倉期のものとされ、他は南北朝時代のもが多く、伝橋本公夏筆本は室町後期のものと言われている。『俊頼髓脳』、『金葉和歌集』いずれの写本とも「ふみもまだみず」と「まだふみもみず」の双方が見られ、単純には解決できない。新井幸恵氏^{注3)}は、

この本文異同は『金葉和歌集』の撰と共に表れ、一筋縄ではいかないようである。しかし、現調査段階では数量的にはやや「まだふみもみず」の本文が

多い。金葉和歌集の写本は多々存在するが、初撰二度本系統の本文が「まだふみもみず」を採っていることからしても、『百人一首』にみられる「まだふみもみず」がこの歌の原形である可能性が高いと思われる。

と述べ、現在よく知られている「まだふみもみず」が原形である可能性が高いとして、吉野樹紀氏^{注3}は、歌の異同について、

この歌合がいつごろのものであるかは特定されないが、藤原保昌が丹後守であった時期をもとに、ある程度の年代は推定されており、和泉式部が藤原保昌とともに丹後にいたのは寛仁四年（一〇二〇）か治安元年（一〇二二）以降、万寿二年（一〇二五）ごろまでと考えられている。

ところが、現存する文献でこの和歌が収められている最も古いものは天永二年（一一一一）から永久二年（一一一四）頃に成立したと考えられている『俊頼髓脳』であり、勅撰和歌集では『金葉和歌集』に収められている。『金葉和歌集』は『俊頼髓脳』の著者でもある源俊頼が撰者となり大治元年から二年（一一二六～一一二七）の間に三度にわたって撰進されたものである。詠まれた時から俊頼髓脳まで約九十年の空白がある。もちろん、現存する書承の資料がないからといって、それが不在の証明になるわけではないが、この九十年の間に撰進された『後拾遺和歌集』にもとられていない。吉海直人は、小式部内侍は俊頼によって発見されたのだと述べているが、さらにいうならば、このとき小式部内侍歌はすでに説話の中の存在になっていたのである。それを裏づけるように、その歌句には異同が多い。

と述べている。また、小山順子氏^{注4}は、

なお『俊頼髓脳』では、和歌本文が第二句「いくのゝさと」、第四句「ふみもまだみず」となっている（定家本・顕昭本とも）。『金葉集』でも第四句は「ふみもまだみず」となっており（再奏本・三奏本とも）、『百人一首』と本文に異同がある。但し、他出文献ではすべて『百人一首』と同じ本文であり、中世以後、一般的に流布していたのは「いくの道の…まだふみも見ず」の形であったと考えられる。

と述べ、異同の存在を指摘するに留めている。また、安道百合子氏^{注5}は、

ところで、『俊頼髓脳』に紹介され、『金葉集』に入集した歌の第四句は「ふみもまだみず」であった。現在、人口に膾炙している「まだふみもみず」ではない。この句の違いはどう理解するとよいのだろうか。

「まだふみもみず」になったのは、おそらく定家の『八代抄』以後である。

その詞書には「和泉式部丹後に侍りける比、中納言定頼文やありつると尋ね侍りければ」とある。（傍線ママ）

と述べた上で詞書のあり方に触れた上で、

すなわち、明らかに掛詞であることが理解される場合は、詞書に「文」の言葉があるとき、もしくは恋文の連想が生じるような状況が説明されているときに限られるといつてよい。そうすると、「大江山」歌の場合もここに「文」が掛けられているとの理解には、詠歌状況の説明を伴った伝承であったことの意味が大きいということになる。

初出および『金葉集』では「ふみもまだみず」であった。歌は声に出されて初句から順に耳にはいる。「ふみもまだみず」というときにはまず「手紙もまだ見えていない」の意味が前面にあらわれる。定頼の問いに答えるという状況説明を伴って、その答え「手紙もまだ見えておりません」という意味が先に来る。ところが、「まだふみもみず」になると、「踏みみる」の連続性が「まだ」にさえぎられないため、手紙の意味が二次的なものに後退し、まだ踏んでみたことがない、つまり、丹後の国までの道のり、さらには天の橋立にまだ行ったことがありませんという「踏み」の意味が強くなってくると考えられる。

と述べている。安道氏の指摘通り、「ふみもまだみず」よりも「まだふみもみず」のほうが「文」よりも「踏み」の意味が強くなると判断できる。しかし、安道氏は『金葉和歌集』の大江山の歌の第四句の写本間の異同については特に触れないまま、第四句を「ふみもまだみず」と認定したうえで、その第四句目が「まだふみもみず」になったのは、おそらく定家の『八代抄』以後である」と述べている。

もちろん、『定家八代抄』以後の改変である可能性がないわけではないだろうが、先んじて成ったとされる『袋草紙』や『梁塵秘抄』、『無名草子』などをどのように見るか、という問題や『俊頼髓脳』や『金葉和歌集』の写本間の異同についての問題などについて安道氏は述べておらず、これらの問題についても一応の整理をしておく必要がある。先ほど、『俊頼髓脳』の諸本の異同を確認したが、現存する諸本の中で、顕昭本系で信頼の置かれている久遠宮家旧蔵本、定家系で信頼の置かれている冷泉時雨亭文庫蔵本のいずれにも「ふみもまたみず」と記されている^{注6}。この点を考慮すると「ふみもまたみず」が先行し、後に「まだふみもみず」への改変が起こったと考えるのが妥当ということになるだろう。

では『金葉和歌集』の編纂過程で「まだふみもみず」になったのだろうか、あるいは『金葉和歌集』から『袋草紙』までのどこかの段階で改変があったのであるか。『金葉和歌集』に関しては先に述べたように、写本間の揺れがどの段階で起こったのか、現段階では未詳ということであり、『袋草紙』についても、現存する本は全て欠尾本で、その成立の詳細が不明とされる。ただし、清輔著とされる歌論集『和歌初学抄』（奥書によれば嘉応元・一一六九年、『和歌現在書目録』によれば仁安元・一一六六年）にも「まだふみもみず」とある。いずれも現存するものは写本のため、どこまで突き詰めても写本筆録者の改変の可能性を排除できないのだが、一応の整理すると、次のように言えるだろう。

1、小式部内侍の大江山の歌のオリジナルで第四句が「ふみもまだみず」であった場合

(イ)『金葉和歌集』編纂のどこかの段階で「まだふみもみず」に改変があり、『金葉和歌集』編纂以後「まだふみもみず」が定着した。

(ロ)『金葉和歌集』までは「ふみもまだみず」であったが、それ以後、『袋草紙』が成るまでの間に「まだふみもみず」となった。

(ハ)『袋草紙』が成る時点で「まだふみもみず」に改変された。

2、小式部内侍の大江山の歌のオリジナルで第四句が「まだふみもみず」であった場合

(イ)『俊頼髓脳』で「ふみもまだみず」に改変がなされたが、『金葉和歌集』編纂途中のどこかの段階で、「まだふみもみず」の形に戻された。

(ロ)『俊頼髓脳』の時点で「ふみもまだみず」に改変がなされ、『金葉和歌集』編纂後、『袋草紙』が成るまでの段階で「まだふみもみず」の形に戻された。

(ハ)『袋草紙』が成る時点で「まだふみもみず」に戻された。

以上は、『金葉和歌集』、『袋草紙』の写本の当該歌に関する書写が各々原本通りに書写されていると仮定した場合である。先にも述べた通り、それぞれの写本の筆録者の改変の可能性はもちろん否定しきれないわけだが、『俊頼髓脳』と『金葉和歌集』のいずれにも源俊頼が関わっていることを考慮すれば、源俊頼は小式部内侍の大江山の歌の第四句を「ふみもまだみず」とらえていた、と推定してよいのではないだろうか。

4、「いくのみちの」の異同について

次に、第二句の「いくのみちの」についても簡単に触れておきたい。『俊頼髓脳』では、第二句が「いくののさとの」と記されている。この点について、小山西子氏^{注7}は

生野も大江山と同様に、小式部内侍歌によって注目を集めた歌枕である。

院政期においては「^{いくの}幾幅」との掛詞で「生野の里」と詠まれるものも見られたが、その後は大江山との結び付きのもとに、「生野—行く野」の掛詞がその修辞の中心となった。また前節に述べたように、大江山は小式部内侍歌の後、単一の歌枕、一つの境界としての「点」を意味するのみならず、「京—大江山—生野—天橋立」の道程という「線」を喚起させる歌枕となった。同様のことが生野についても言えよう。「生野」の音から「行く野」が旅路を意味し、「幾野」がはるかに続く野を意味するという、二重の連想が音によって喚起

されたと考えられ、京から大江山という西の境界を過ぎ、天橋立へと到る道程そのものが「生野」には象徴されているのである。

この点を勘案するならば、小稿の冒頭に述べたように、『俊頼髓脳』においては第二句が「いくののさと」であったのが、『金葉集』以後、「生野の道の」で定着した理由が理解される。「生野」が単に、京から天橋立へと到る際に通過する「点」を意味するに過ぎない歌枕であるなら、「生野の里の」でも構わない。しかし、天橋立までの長く遠い道のりを「生野」が象徴するとすれば、「線」を連想させる「生野の道の」である方が、より適切であり、また自然であると受け止められたためと考えられるのである。(傍点ママ)

と述べている。小山氏が指摘するように「京—大江山—生野—天橋立」の道程という「線」を喚起させる歌枕として、また「生野」の音から「行く野」が旅路を意味し、「幾野」がはるかに続く野を意味するという、二重の連想として『金葉和歌集』以後定着したものと考えられる。

では、当該歌の第二句目は本来「いくののさと」であったのか、あるいは「いくののみち」であったのか。この点も第四句目同様、その判断は難しい。しかし、俊頼が「さと」と「みち」の改変にかかわっている可能性が高いことは、言えるであろう。ここで『俊頼髓脳』の成立以前のものと言われている「いくののさと」の用例をいくつか拾っておく。

『玄々集』

まことにや ひとのくるには たえにけむ いくののさとの なつひきのい
と 藤原兼房

(この歌は金葉集三奏本 第九・雑上 五二九番に題詞「いかなる女のものにかありけん、つかはしける」として収載されている。)

『堀川院御時百首和歌』

うのはなの さけるかきねか ぬのさらす いくののさとの こちこそす
れ 藤原頭仲

『散木奇歌集』

おもひかね いくののさとを へたつれば かすみをさへも うらみつるか
な

ここに挙げた「いくののさと」の用例の出典はいずれも俊頼に関連の深いものである。『玄々集』は能因の撰ではあるが、ここで取り上げた歌はいずれも『金葉和歌集』に採録されている。『白河百首』にしても『散木奇歌集』にしても、俊頼が関係している。このことを考慮すると、小式部内侍の大江山の第二句の変遷については、次のような可能性が指摘できよう。

1、オリジナルでは「いくののみちの」とあったものを、『俊頼髓脳』収録時に俊頼(または『俊頼髓脳』の筆録者)によって「いくののさと」と記載された。『金葉和歌集』収録時にはオリジナルの「いくののみちの」に戻された。

2、オリジナルに「いくののさと」とあり、『俊頼髓脳』でもそのまま収載されたが、『金葉和歌集』に収録する際に「いくののみちの」と改変され、以後、「いくののみち」が定着した。

このことについては『俊頼髓脳』、『金葉和歌集』のそれぞれの写本間の揺れは多くなく^注、右に指摘したいずれかになると考えてよいのではないか。

5、事実に基づく話か、架空の話か

ところで、当該歌との関連で定頼集の次の歌が引き合いに出されることがある。式部がやすまさがめになりて、たんごになりたるに、きやせまし、いかがせましといふとききてやりたまひける

ゆきゆかず きかまほしきを いづかたに ふみさだむらむ あしのうら山
小式部内侍の母、和泉式部に藤原定頼が送った歌とされるものである。小式部内侍の大江山の歌が詠まれる場面に、時間的にはかなり近いものであることがうかがえる。萩谷朴氏^註は定頼集の歌との関連から、

定頼が和泉式部の決断に迷っているのを調戲った事実とを、からみあわせて

虚構した架空の説話であるかもしれない。

と述べている。また、三木紀人氏^{注10}は、

よほど結晶度の高い説話として早くから定着していたのか、それ以前に、この事実そのものが、説話作者の私意を要しないほど劇的なものであったのか。とにかく、薄幸ながら才気煥発の美少女の面影をあざやかに伝える話であり、和歌である。

と述べている。そして、吉海直人氏^{注11}は「定頼と小式部の仕組んだでつち上げの可能性もある」と述べている。虚構説が指摘される一方で、柏木由夫氏^{注12}は、

歌中に「踏み」と小式部の歌と同じ表現があり、どちらも丹後の「足卜山」と「天の橋立」に行くことを詠む点で、時期的に重なるため注目される。小式部はこの定頼集を意識しつつ「大江山」の詠を成したのだろうか。

と述べている。また武田早苗氏^{注13}は、

子の説話に出来過ぎの感があることは否めない。しかし、和泉式部の丹後下向から、この逸話が説話集に採録されるまでに約九〇年ほどの猶予があるとしても、あれだけ人口に膾炙した逸話を生み出した源に火種がないとは考えがたく、萩谷氏のようにまったくの虚構とすることは賛同しかねる。

(中略)

しかし、少なくとも、小式部内侍が「大江山」歌を詠じる直前に、しかも母親である和泉式部と、藤原彰子とが、「天の橋立」という語を組み交わしていたことは事実であり、これを無視することはできない。さらに、これらの事情を定頼が知っていた可能性は高く、彼の驚きは、従来推測されてきたよりも数段勝っていたのではないかと考えられる。

と述べている。このように、虚構の話ととらえる説、ある程度の実実に基づくととらえる説と、いずれもが提示されるのは、説話の広がり方の問題だと思われるが、小式部内侍の大江山の歌のオリジナルにたどり着けないところに端を発しているものということも言えるだろう。兼築信行氏^{注14}は、これらの説について検討する中で、

小式部内侍の歌の虚構性を吟味する場合、和歌自体の真偽と、詠歌状況自体の真偽を分けて検討する必要が、おそらくはあるのだろう。様々なケースが想像しうる。たとえば、歌合という設定の部分が、後代に不可もしくは変容された可能性も排除できない。俊頼によって提示されるまで、テキストはひたすら伏流して姿を現さないのだから。

と述べた上で、

「大江山」の歌とその説話の真偽をめぐる問題は、結局のところ振出しに戻ってしまふ。

と述べている^{注15}。「大江山の歌」には「小式部内侍」という原作者（小式部内侍以外の作者を想定することも含め）があり、それを筆録、書写、伝録した人物がいる。筆録、書写、伝録した人物による変更の理由には、意図しての変更、意図しない転写上の単純な間違い、などいろいろなことが考えられる。先人諸氏もこれらの問題に悩まされてきたことと思われるが、結局のところ、真偽のほどを追及するにしても、現状での初出となる『俊頼髓脳』を、さらには『金葉和歌集』などの諸文献の記述をどこまで信頼するかという点にかかってしまうのだろう。

6、おわりに

以上、小式部内侍の大江山の歌の歌句の異同について考えてきた。現状では原本を確認することが出来ず、いくつかの可能性を指摘するにとどまったが、そうであっても、オリジナルの姿に近づくようとする作業は、歌解釈の上で重要なことであると考えている。

小式部内侍の大江山の歌の第二句、第四句について、『俊頼髓脳』『金葉和歌集』そして『袋草紙』までのいずれかの時点で歌句の変更が起こったものだろうとしか現時点では言えないものの、第二句「いくののさとの」から「いくののみちの」への改変には、俊頼が関わっている可能性が高いと思われる。「いくののさとの」から「いくののみちの」への改変により、「ふみ」は「文」よりも「踏み」の意味

を第一義としたほうが歌全体のバランスがよくなるとの判断が『金葉和歌集』以後、『袋草紙』までの間になされ、その結果「ふみもまだみず」から「まだふみもみず」へと歌句の改変がなされたと見るのが穏当ということになろう。

- 注1 勅撰集入集の小式部内侍歌は、『勅撰作者部類』（国学院編）では八首を数えるが、三木紀人氏（『垂流の世代のアイドル―小式部』）『国文学 解釈と教材の研究』二〇・十六 学燈社 昭和五十年）は二首のみと述べている。岩波新大系『八代集索引』では三首を数えている。
- 注2 新井幸恵「小式部内侍歌―「大江山」詠歌を巡って―」（『東洋大学大学院紀要』三十九集 平成十四年）
- 注3 吉野樹紀「歌語「大江山」の和歌史的展開」（『沖縄国際大学日本語日本文学研究』九（一）平成十六年十二月）
- 注4 小山順子「大江山生野の道の」考」（『京都大学国文学論叢』十七 平成十九年）
- 注5 安道百合子「「まだふみもみず」考―小式部内侍「大江山」歌説話教材の要点―」（『梅光学院大学日本文学研究』四十七 平成二十四年）
- 注6 兼築信行氏（『小式部内侍の「大江山」の歌について』、『赤羽淑先生退職記念論文集』ノートルダム清心女子大学内 赤羽淑先生退職記念の会 平成十七年）は、「定家本も顕氏昭本も和歌の第二句の本文は「いくののさとの」となっている。そして第四句は、定家本では『金葉集』と同一、顕昭本は「まだふみもみず」である」と述べている。また、小山順子氏（『大江山生野の道の』考）（『京都大学国文学論叢』十七 平成十九年）は、「なお『俊頼髓脳』では、和歌本文が第二句「いくののさとの」、第四句「ふみもまだみず」となっている（定家本・顕昭本とも）」と述べている。

- 注7 注4に同じ
- 注8 関西大学図書館蔵本には、「里」の右に異本注記として「みちイ」とある。

- 注9 萩谷朴『平安朝歌合大成』増補新訂第二卷（同朋社出版 平成七年）
- 注10 三木紀人「垂流の世代のアイドル―小式部」（『国文学 解釈と教材の研究』二〇・十六 学燈社 昭和五十年）
- 注11 吉海直人『百人一首の新考察』（世界思想社 平成五年）。なお、注2の吉野氏の引用中の「吉海直人は、小式部内侍は俊頼によって発見されたのだと述べている」に関しては、『百人一首の新研究―定家の再解釈論―』（和泉書院 平成十三年）に記されている。
- 注12 柏木由夫「藤原定頼年譜考―その後半生について（上）―」（『大妻国文』二十四 平成五年）
- 注13 武田早苗「小式部内侍「大江山」歌の背景」（『相模国文』三十三 平成十五年）
- 注14 兼築信行「小式部内侍の「大江山」の歌について」（『赤羽淑先生退職記念論文集』ノートルダム清心女子大学内 赤羽淑先生退職記念の会 平成十七年）
- 注15 このほか、古瀬雅義氏（『小式部内侍「大江山」歌説話で語られるもの―視点のずれによる藤原定頼の役割の変化―』（『国語国文論集』二十五号 安田女子大学日文学科）は、説話部分のずれについて、「時代が下るにしたがって話者にとつて、登場人物の人物像が次第に希薄になり、遠い存在となることによつて、次第に個々の逸話において語られる個別事象の言動から、話者の勝手な部分的人物像が形成され、それが独り歩きして語られ始めることに起因するのではないか。」などと述べている。

平成30年3月発行

編集・発行 茨城工業高等専門学校
総務課研究協力・地域連携係

〒312-8508 茨城県ひたちなか市中根 866

TEL 029-271-2952